

コミュニケーション能力とパーソナルスペースの関連性

齋藤 ひとみ

情報教育講座

The Relationship between Personal Space and Communication Skills

Hitomi SAITO

Department of Information Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. はじめに

電車や喫茶店などで空いている席を選ぶとき、我々は通常ある程度他人と距離を置くことを好む。このように、一人ひとりが持っているある一定の空間はパーソナルスペースと呼ばれている。パーソナルスペースに関する研究は、1960年代からアメリカにおいて盛んになり、近年でもその研究が進められている。パーソナルスペースの研究が盛んになった背景には、社会が発展するにつれて、限られた空間の中で複数の人間が何かを行うという状況が多く存在するようになったことが考えられる。パーソナルスペースの研究は、そのような環境の中で人はどういうときに不快感を持つのか、またどうすれば快適にすごせるのかに対するいくつかの答えを提示してきた。

渋谷(1990)は、パーソナルスペースの定義を「自我の拡大した空間」、「自己を庇護する空間」、「コミュニケーションの空間」の3つに分類している。「自我の拡大した空間」とは、パーソナルスペースを個人の体を取り巻く目に見えない境界線で囲まれた領域ととらえる考え方である。この定義では、自己を防衛する必要があるかどうかについての意識的あるいは無意識的な知覚に応じて、パーソナルスペースは縮小したり、拡大したりするとされる。「自己を庇護する空間」とは、パーソナルスペースを身体を傷つける恐れから自己を守り、自尊心を庇護するための空間とする考え方である。この定義では、知覚された恐れが大きいほど、パーソナルスペースは大きくなるとされる。最後の「コミュニケーションの空間」とは、パーソナルスペースを他者との相互交渉を行う、個人を取り巻く領域と捉える考え方である。この定義では、相手との心理的距離(好意や馴染みの程度)が小さければ、対人場面で相手との間に置かれる物理的距離も小さくなるとしている。

以上のように、パーソナルスペースについては様々な定義が提唱されているが、共通していえることは、

パーソナルスペースとは、人の体を取り巻く泡のような空間であり、その人と共に持ち運ばれ、さまざまな人間関係をより円滑に行うために伸縮するような性質を持っているということである。

本研究では、パーソナルスペースを「コミュニケーションの空間」とする立場に立ち、個人がもつコミュニケーションに関わる特性がパーソナルスペースに与える影響について検討する。

パーソナルスペースと個人特性の関係について扱った研究として、児玉・後藤(1995)は、不安特性の高低がパーソナルスペースに与える影響について検討している。調査では、不安特性の測定と、投影法によるパーソナルスペースの測定を行った。分析の結果、性差や対象に関わらず、高不安群は、低不安群にくらべて、パーソナルスペースが広くなることが明らかになった。

先行研究では、個人特性として不安特性に着目して検討を行った。本研究では、コミュニケーションに関わる個人特性とパーソナルスペースに着目した検討を行う。コミュニケーションにおいて、人との間合いはとても重要であると考えられる。パーソナルスペースは、人とコミュニケーションをとるときにどの程度距離を置くかを示す指標であり、コミュニケーションスキルが高い人と低い人では、違いがあると推測される。そこで、コミュニケーション能力を測る指標としてKiss-18を使用し、コミュニケーション能力の高低での違いを検討する。

また、普段から人と話すのが苦手であったり、初対面ではなかなか打ち解けられない人は、そうでない人に比べてパーソナルスペースが広いのではないかとということが考えられる。これは、児玉・後藤(1995)の特性不安とも関係が深いと考えられる。本研究では、特に人とのコミュニケーションの際の不安感をとらえるために、特性シャイネス尺度を使用し、シャイネスの高低での違いを検討する。

本研究では、パーソナルスペースの測定方法として、先行研究と同様に投影法での調査を行う。投影法のデメリットについては先行研究でも述べられているが、本研究では、親しい人・知らない人といった状況を設定したパーソナルスペースについて測定するため、投影法を用いた。

以降、2章では調査方法、3章で分析結果について述べ、4章で結果について考察する。

2. 方法

2.1. 調査対象者

13歳～60歳の25名に対して、心理指標とパーソナルスペースに関する調査紙を配布し、回答を得た。

2.2. 心理指標

2.2.1. Kiss-18

菊池（2004）によって作成された尺度で、社会的スキルを身につけている程度を測定する。この尺度は最初に、Goldstein et.al.（1986）のリストをもとに、50項目から成る質問紙尺度作成し、項目－全体相関の高い18項目を最終的な尺度項目として選んだものである。質問項目を以下に示す。各項目を1～5の段階評価尺度により評価し、合計点が高いほど社会的スキルを身につけていることを表す。

- (1) 他人と話していて、あまり会話がとぎれない方ですか。
- (2) 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
- (3) 他人を助けることを、上手にやれますか。
- (4) 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
- (5) 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。
- (6) まわりの人とでも、すぐに会話が始められますか。
- (7) こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
- (8) 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
- (9) 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。
- (10) 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
- (11) 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。
- (12) 仕事の上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか。
- (13) 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
- (14) あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
- (15) 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。

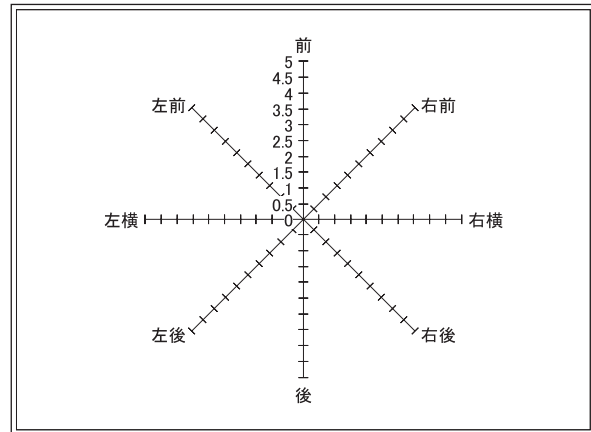


図 1: パーソナルスペースの測定用紙

- (16) 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。
- (17) まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか。
- (18) 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。

2.2.2 特性シャイネス尺度 (Trait Shyness Scale)

相川・藤田（2005）によって作成された尺度で、リアリーの定義に従い人格特性としてのシャイネスを測定する。近年シャイネスをある特定の社会的場面で生起する感情的な反応と、特定の場面を越え人々が一般に持っている人格特性とに区別するようになっている。リアリーは、後者のシャイネスを「特定の社会的状況を超えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群」と定義している。16項目から成り、その内、1,5,8,11,13,15番は逆転項目である。質問項目を以下に示す。各項目を1～5の段階評価尺度により評価し、合計点が高いほど、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴を持ちやすいことを表す。

- (1) 私は新しい友人がすぐできる
- (2) 私は人がいる所では気おくれしてしまう
- (3) 私はひっこみ思案（じあん）である
- (4) 私は人の集まる所ではいつも、後ろの方に引っ込んでいます
- (5) 私は人と広くつきあうのが好きである
- (6) 私は他人の前では、気が散って考えがまとまらない
- (7) 私は内気（うちき）である
- (8) 私は誰とでもよく話す
- (9) 私は自分から進んで友達を作ることが少ない
- (10) 私は、はにかみやである
- (11) 私は初めての場面でも、すぐにうちとけられる
- (12) 私は人前（ひとまえ）に出ると気が動転してし

表 1: Kiss-18 と特性シャイネスの得点

対象者	Kiss-18		特性シャイネス	
	得点	群	得点	群
1	35	低	46	高
2	44	低	63	高
3	47	低	51	高
4	52	低	41	中
5	58	低	53	高
6	59	低	52	高
7	62	低	45	高
8	62	低	31	低
9	64	低	44	高
10	64	低	38	低
11	66	中	44	高
12	66	中	45	高
13	66	中	43	高
14	67	中	41	中
15	67	中	38	低
16	69	高	42	中
17	69	高	47	高
18	70	高	32	低
19	70	高	42	中
20	71	高	45	高
21	71	高	26	低
22	73	高	41	中
23	73	高	25	低
24	83	高	20	低
25	90	高	25	低

まう

- (13) 私は自分から話し始める方である
 (14) 私は人目（ひとめ）に立つようなことは好まない
 (15) 私は知らない人とでも平気で話ができる
 (16) 私は人前（ひとまえ）で話すのは気がひける

2.2.3. パーソナルスペース

児玉・後藤（1995）で用いられた調査紙を参考に作成した。測定対象項目は「1. 親しい同性」、「2. 親しい異性」、「3. 知らない同性」、「4. 知らない異性」の4項目から成り、8方向（前、右前、右横、右後、後、左後、左横、左前）において、それぞれ各対象が5m離れた距離から近づいてきたとき、「それ以上近づいてもらいたくない」と思われるイメージ距離をチェックさせた。図1は、実際にアンケート調査をした質問紙の一部である。

結果

調査対象者25名について、Kiss-18、特性シャイネス、4つのタイプの対象に対する8方向のパーソナルスペースを測定した。3.1で Kiss-18と特性シャイネスの得点

について概要を述べたあと、3.2以降では各尺度の得点によって対象者を群に分け、群間の距離差を比較する。

3.1. Kiss-18と特性シャイネス得点の比較

調査対象者25名の Kiss-18と特性シャイネスの得点を表 1に示す。対象者は Kiss-18の得点の低い順に並んでいる。群は得点によって高・中・低に分けている。Kiss-18と特性シャイネスの得点について相関分析を行った結果、 $r=-0.696$ となり、負の相関がみられた。同様の結果は、松井（1999）でも報告されている。また菊池（2004）のレビューでは、Kiss-18は対人的コンピテンス、自己開示、自己効力感などのような積極的な体験を測る他の尺度とは正の関係があり、特性シャイネスや対人不安、孤独感のような否定的体験の尺度とは負の関係があると述べられている。

本研究では、Kiss-18(社会的スキル)の得点の上位10名を高スキル群、下位10名を低スキル群とした。各群の平均得点は、高スキル群が73.9($SD=6.63$)、低スキル群が54.7($SD=9.37$)であり、2群の得点について1要因分散分析を行った結果、群間に有意な差が見られた($F(1,18)=25.19, p<.01$)。また、特性シャイネス(内気度の程度)の得点の上位12名を高シャイネス群、下位8名を低シャイネス群とした。各群の平均得点は、高シャイネス群が48.17、低シャイネス群が29.38であり、2群の得点について1要因の分散分析を行った結果、群間に有意な差が見られた($F(1,18)=46.26, p<.01$)。群間の得点に有意な差が確認されたことから、以降では各尺度の群間の比較結果について報告する。

3.2. Kiss-18の高低における各方向の距離の比較

まずは Kiss-18の高スキル群、低スキル群でのパーソナルスペースの比較を行う。8方向のパーソナルスペースについてグループ（高スキル群・低スキル群）を被験者間要因、対象（親しい同性、親しい異性、知らない同性、知らない異性）を被験者内要因とする2要因混合分散分析を実施した。

分析結果から前・左横方向については、対象の主効果（前： $F(3,54)=9.94, p<.01$ ；左横： $F(3,54)=9.01, p<.01$ ）と交互作用が有意だった（前： $F(3,54)=2.84, p<.05$ ；左横： $F(3,54)=2.91, p<.05$ ）。グループの単純主効果を検定したところ、前方向のみ知らない異性において有意傾向だった（前： $F(1,18)=3.35, p<.10$ ）。また対象の単純主効果を検定したところ、低スキル群において有意だった（前： $F(1,54)=11.71, p<.01$ 、左横： $F(3,54)=11.06, p<.01$ ）。対象の単純主効果について多重比較を実施した結果、低スキル群では親しい同性、異性に比べて、知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった ($p<.05$)。

右前・左前・右横方向については、対象の主効果（右前： $F(3,54)=8.81, p<.01$ ；左前： $F(3,54)=8.94, p<.01$ ；

表 2: 対象ごとのKiss-18の高低での8方向のパーソナルスペースの平均

対象	スキル	前	右前	右横	右後	後	左後	左横	左前
親しい同性	高	0.75	0.80	0.70	0.85	0.75	0.80	0.80	0.80
	低	0.75	0.60	0.55	0.60	0.60	0.60	0.60	0.70
親しい異性	高	0.70	0.70	0.70	0.75	0.70	0.75	0.75	0.75
	低	0.55	0.60	0.60	0.60	0.60	0.65	0.60	0.65
知らない同性	高	1.15	1.15	1.15	1.60	1.65	1.65	1.20	1.20
	低	2.05	2.00	1.95	2.10	2.15	2.15	2.05	2.10
知らない異性	高	1.15	1.15	1.10	1.30	1.35	1.30	1.15	1.20
	低	2.05	1.95	2.05	2.20	2.25	2.15	2.05	2.00

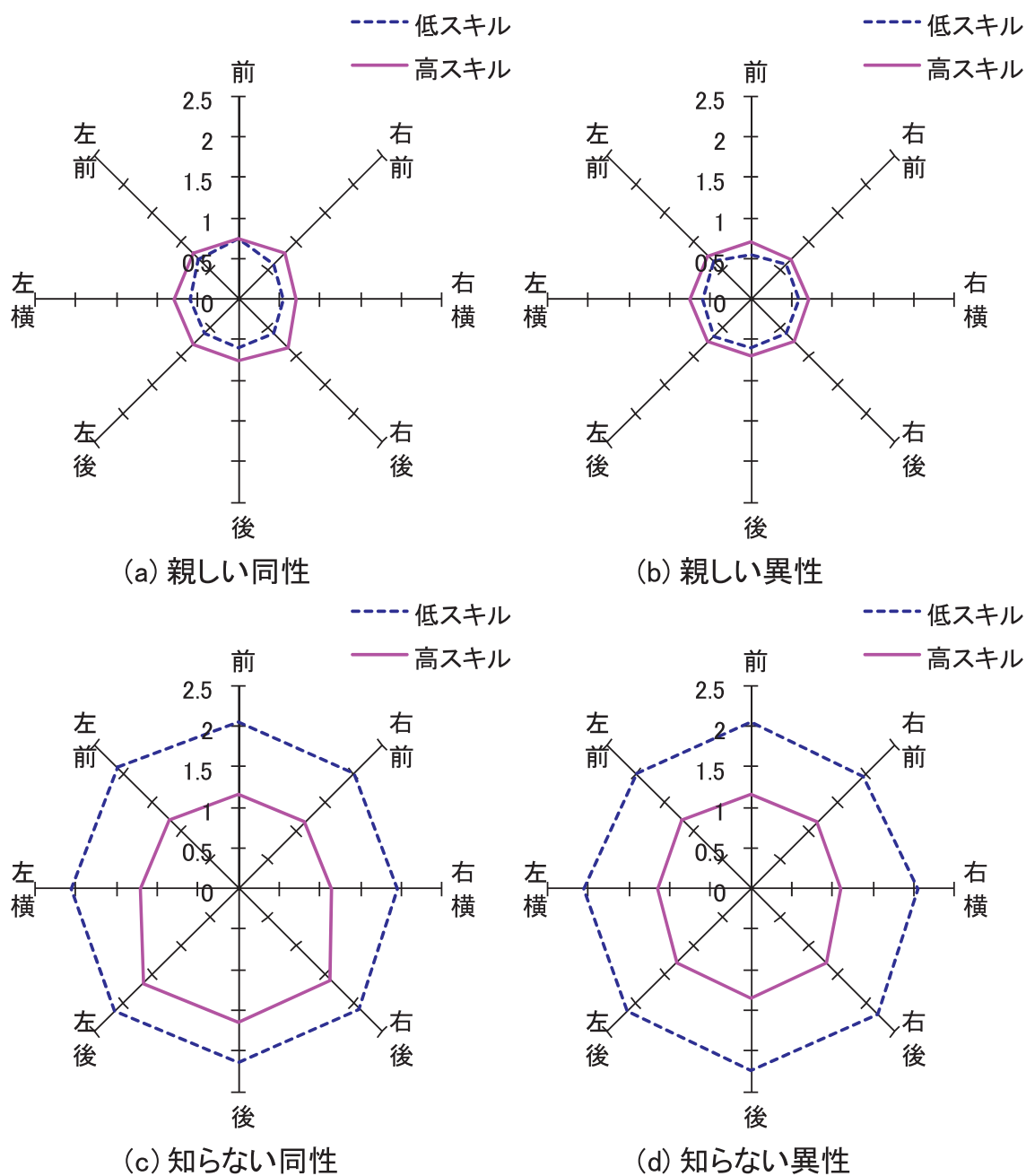


図 2: 対象ごとのKiss-18の高低での8方向のパーソナルスペース

表 3: 対象ごとの特性シャイネスの高低での8方向のパーソナルスペースの平均

	シャイネス	前	右前	右横	右後	後	左後	左横	左前
親しい同性	高	0.67	0.58	0.54	0.50	0.46	0.50	0.58	0.67
	低	0.75	0.63	0.56	0.75	0.81	0.75	0.56	0.63
親しい異性	高	0.63	0.67	0.67	0.63	0.63	0.67	0.71	0.75
	低	0.69	0.69	0.63	0.69	0.63	0.69	0.63	0.69
知らない同性	高	2.00	1.96	2.04	2.13	2.17	2.21	2.17	2.13
	低	0.94	0.94	1.00	1.56	1.63	1.56	1.00	0.94
知らない異性	高	1.96	1.92	2.08	2.17	2.21	2.17	2.13	1.96
	低	1.19	1.13	1.19	1.38	1.44	1.38	1.19	1.19

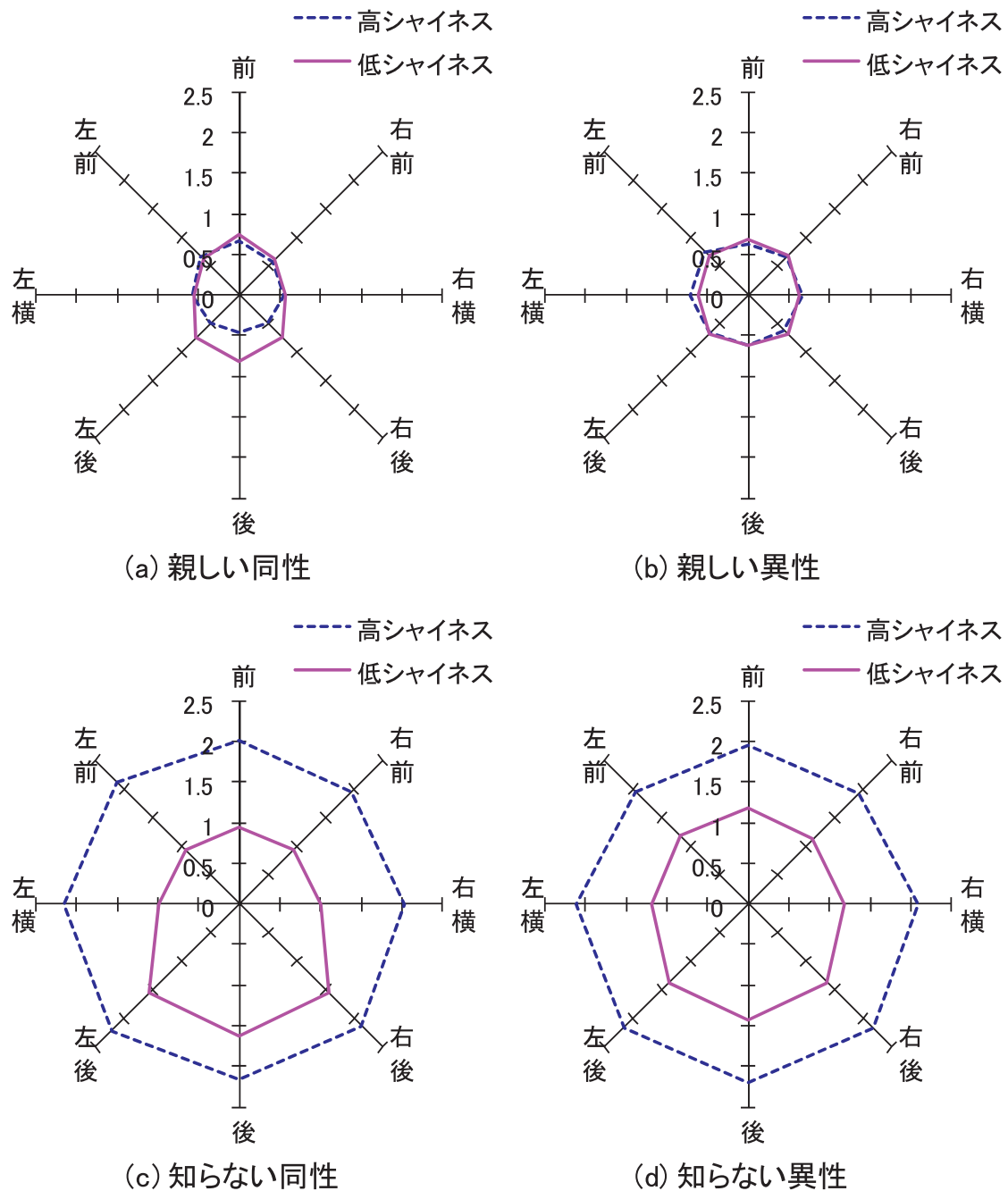


図 3: 対象ごとの特性シャイネスの高低での8方向のパーソナルスペース

右横: $F(3,54)=9.02, p<.01$)と交互作用が有意傾向だった(右前: $F(3,54)=2.67, p<.10$; 左前: $F(3,54)=2.50, p<.10$; 右横: $F(3,54)=2.67, p<.10$)。対象について多重比較を行った結果、スキルによらず、親しい同性・異性に比べて、知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった。ただし交互作用が有意傾向であり、低スキル群における対象の単純主効果が有意であった(右前: $F(3,54)=10.56, p<.01$; 左前: $F(3,54)=10.44, p<.01$; 右横: $F(3,54)=10.72, p<.01$)ことから、高スキル群に比べ、低スキル群の方が対象がより強く影響した可能性が考えられる。

後・右後・左後方向については、対象の主効果のみ有意だった(後: $F(3,54)=12.60, p<.01$; 右後: $F(3,54)=10.63, p<.01$; 左後: $F(3,54)=10.80, p<.01$)。多重比較の結果、高・低スキル群ともに、親しい同性・異性に比べて知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった。

3.3. 特性シャイネスの高低における各方向の距離の比較

次に特性シャイネスの高シャイネス群と低シャイネス群のパーソナルスペースを比較する。8方向のパーソナルスペースについてグループ(高シャイネス群・低シャイネス群)を被験者間要因、対象(親しい同性、親しい異性、知らない同性、知らない異性)を被験者内要因とする2要因混合分散分析を実施した。

分析結果から前方向については、対象の主効果(前: $F(3,54)=9.94, p<.01$)と交互作用が有意だった(前: $F(3,54)=2.84, p<.05$)。グループの単純主効果を検定したところ、知らない同性において有意傾向だった(前: $F(1,18)=3.35, p<.10$)。また対象の単純主効果を検定したところ、高シャイネス群において有意だった(前: $F(1,54)=11.71, p<.01$)。対象の単純主効果について多重比較を実施した結果、高シャイネス群では親しい同性、異性に比べて、知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった($p<.05$)。

右前・左前方向については、対象の主効果(右前: $F(3,54)=7.61, p<.01$; 左前: $F(3,54)=8.04, p<.01$)と交互作用が有意傾向だった(右前: $F(3,54)=2.40, p<.10$; 左前: $F(3,54)=2.50, p<.10$)。対象について多重比較を行った結果、シャイネスの高低によらず、親しい同性・異性に比べて、知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった。ただし交互作用が有意傾向であり、高シャイネス群における対象の単純主効果が有意であった(右前: $F(3,54)=9.17, p<.01$; 左前: $F(3,54)=9.49, p<.01$)ことから、低シャイネス群に比べ、高シャイネス群の方が対象がより強く影響した可能性が考えられる。

右横・左横・右後・左後・後方向については、対象

の主効果のみ有意だった(右横: $F(3,54)=7.73, p<.01$; 左横: $F(3,54)=8.19, p<.01$; 右後: $F(3,54)=9.57, p<.01$; 左後: $F(3,54)=9.83, p<.01$; 後: $F(3,54)=11.14, p<.01$)。多重比較の結果、シャイネスの高低によらず、親しい同性・異性に比べて知らない同性・異性の方がパーソナルスペースが大きくなることが分かった。

4. 考察

4.1. コミュニケーション能力がパーソナルスペースに与える影響

3.2の結果から、コミュニケーション能力がパーソナルスペースに与える影響について考察する。体の前面である前や横方向においては、スキルの高低による影響が見られ、高スキル群では対象による違いが見られなかったが、低スキル群では親しい同性・異性よりも知らない同性・異性の方においてパーソナルスペースが広くなることが明らかになった。

それに対して、後ろ方向においては、スキルの高低に関係なく親しい同性・異性より知らない同性・異性の方においてパーソナルスペースが広くなることが明らかになった。

このことは、低スキル群は、知らない人の場合に、前方向も後ろ方向もパーソナルスペースを広く取りたがるのに対して、高スキル群は知らない人でも前方向の距離は親しい人に対する場合とあまり変わらないことを示している。

4.2. 特性シャイネスがパーソナルスペースに与える影響

3.3の結果から、人との関わりにおける不安特性を表わす特性シャイネスがパーソナルスペースに与える影響について考察する。コミュニケーション能力と同様に、体の前面である前方向においては、シャイネスの高低による影響が見られ、低シャイネス群では対象による違いが見られなかったが、高シャイネス群では、親しい同性・異性より知らない同性・異性においてパーソナルスペースが広くなることが明らかになった。

それに対して、横や後ろ方向においては、シャイネスの高低に関係なく親しい同性・異性より知らない同性・異性に対してパーソナルスペースが広くなることが明らかになった。

この結果は、コミュニケーション能力と同様に、シャイネスが高い、つまり内向的で人と打ち解けるのが苦手な人は、知らない人に対して、前方向も後ろ方向も距離を取りたがることが分かった。対して、外向的で人と話すことに不安を感じない人は、知らない人でも前方向の距離は親しい人に対する場合とそれほど大きくは変わらないことが明らかになった。

5. おわりに

一般的に考えて、社会的スキルが高い人、外向性の人はパーソナルスペースが全体的に小さくなり、逆に社会的スキルが低い人、内向性の人はパーソナルスペースが全体的に大きくなるという予想通りの結果を得ることが出来た。しかし、方向性のみがパーソナルスペースに及ぼす影響を調べきれなかったことや、対象が親しければ社会的スキルが低い人、内向性の人の方がそうでない人よりもパーソナルスペースが小さくなる時があるという結果も得た。このことから、今後更に調査を続けてパーソナルスペースに与える影響についてより深く調査、検討していく必要があるだろう。

附記

本研究は、柴田和輝君の卒業論文（平成21年度愛知教育大学情報教育課程）を加筆・修正したものである。

また本研究の一部は、平成21年度科学研究費補助金・若手研究 B（17700604）の助成によった。

参考文献

- 相川 充・藤田 正美（2005）. 成人用ソーシャルスキル自己評価尺度の構成.『東京学芸大学紀要第1 部門教育科学』, 56.
- 菊池 章夫（2004）. KiSS-18 研究ノート.『岩手県立大学社会福祉学部紀要』, 6（2）, 41-51.
- 児玉 昌久・進藤 由美（1995）. パーソナルスペースに及ぼす特性不安の影響.『人間科学研究』, 8（1）, 15-24.
- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P.（1986）. The adolescent: social skill training through structured learning. In Cartledge, G., & Milburn, J. F. (Eds.), Teaching Social Skills to Children. Pergamon Press.
- 渋谷 昌三（1990）.『人と人との快適距離—パーソナル・スペースとは何か』. 東京：日本放送出版協会.
- 松島 るみ（1999）. シャイネスが自己開示に及ぼす影響—社会的スキルを媒介として—.『教育心理学会 41 回総会発表論文集』, 357.

（2010年 9 月17日受理）